

【方法】過去3年間に高齢者市中肺炎で当院に入院した患者(164例・男82例・女82例)を対象に重症度分類, 初期治療に使用した抗菌薬, 治療経過について検討を行った。

【結果】平均年齢82±8歳。65～74歳17%, 75～84歳45%, 85歳以上38%であった。抗菌薬別使用割合は, ペニシリン系25%, セフェム系47%, カルバペネム系21%であった。A-DROP軽症・中等症・重症・超重症の有効率(%)は5例/5例(100%)・82/104(79)・32/42(76)・8/13(31), 死亡率は0/5(0)・4/104(4)・6/42(14)・4/13(31), PSI軽度・中等度・重度のそれは54/59(92)・52/67(78)・21/38(32)及び0/59(0)・2/67(3)・12/38(32)であった。

【結論】A-DROP重症度, PSI危険度が上がるとともに死亡率は増加し有効率は減少した。

II. 特別講演

「日米の市中肺炎ガイドライン」

財団法人 倉敷中央病院
呼吸器内科主任部長

石田 直

第47回新潟化学療法研究会

日時 平成20年6月21日(土)
午後3時30分～
会場 新潟グランドホテル 3F
悠久の間

I. 一般演題

1 小児呼吸器感染症における尿中肺炎球菌抗原キットの有用性の検討

白井 崇準・小澤 淳一・松尾 真意
根岸 潤・阿部 忠明・小嶋 絹子
金子 孝之・大石 智洋・塚野 真也
田口 哲夫

県立新発田病院小児科

2008年4月1日から5月27日までに当院小児科外来受診・入院した生後21日から13歳までの, 発熱や呼吸器症状のある患者53名の小児について, 尿中肺炎球菌抗原, 末梢白血球数, 血清CRP値, 後鼻腔PCR検査を施行した。尿中抗原の測定は, 尿中肺炎球菌抗原迅速キット(NOW Streptococcus Pneumoniae urinary antigen test, Binax, USA)を使用した。対象患者53名のうち尿中抗原検査を同時に施行したのは38名, 尿中抗原陽性患者は6名であった。そのうちPCRで肺炎球菌が検出されたのは5名であった。尿中抗原陰性患者は32名, そのうちPCRで肺炎球菌が検出されたのは23名であった。その結果, 本検査の感度は17.9%, 特異度は90.0%であった。本検査は小児において初期治療での抗菌薬選択に重要な情報が得られ, 有用と考えられたが, 発熱から48時間以内の陰性の評価は慎重に行うべきと考えられた。